

# 序

創感染や創腹壁癒痕ヘルニアなど、創閉鎖にまつわるきわめてポピュラーな合併症は、医療者側からすれば、「よくあることがまた起きた」とか「多少のことは仕方がない」ぐらいの意識で、つい軽視しがちである。今までは、患者の方も寛大に(?)、十分なインフォームド・コンセントもなしにこれらを受け入れてくれていたかもしれない。しかし今や、患者からの良い評価や信頼を得るためには、術後合併症を減らす努力なしでは済まされない時代となった。よって外科医には、メス捌きのみならず、周術期管理の技を確かなものにすることも要求される。

また最近では、『エビデンスに基づく医療』の概念が定着し、さまざまな医療技術の発展への寄与が認められる。その一方で、例えば創処置に代表されるような基本手技に関してはどうかと言うと、従来臨床的論拠のないまま行われてきたものが数多く存在し、いまだに各施設で独自の『伝統的な』方法が継承されている面が大きいように思われる。しかし近年、質の高いエビデンスに則った対策が重視され、今日まで定説とされてきた手法について見直しがなされ、科学的・合理的でかつ経済性も考慮した対策が要求されるようになった。すなわち、かつての『常識』が今日の『非常識』となり、いわゆるパラダイムシフトがみられるようになったのである。

現在、創閉鎖に関連した合併症が注目され、感染症予防・合併症対策についても詳しい創閉鎖の解説書が求められている。そこで、“いかにして術後感染症や合併症を減らしてゼロをめざすか”をコンセプトとし、エビデンスと経験に基づく創閉鎖の手技マニュアルとして本書を企画した。単に創閉鎖の手技の解説のみならず、何に注意を払いどのように対処してゆくか、あるいは、エビデンスとして現時点で何が標準化し何が未確定なものなのか最新情報が盛り込まれ、豊富な写真・シエーマとともに解説されている。

なおここで、執筆者の先生方には、最新の理論・技術を理解しやすく記述していただくべく、数回にわたり多くの注文を申し上げ大変なご努力をしていただいたことに、編者より改めて感謝申し上げたい。そして本書が、新しく他に類を見ない創閉鎖の「バイブル」として、多くの方々に活用・愛用されることを願ってやまない。

2010年2月

炭山嘉伸